

一、二百石 小將組 療馬役 久徳又四郎
 一、二百石 既方組 伯樂方 田中十太夫
 一、百五十拾石 同 伯樂方 佐藤喜右衛門

以上三人也。延寶の金澤圖に、關助馬場東の頭に伯樂與助の居邸を載せたり。此の與助は町馬醫か。咄隨筆に、町馬醫坂井太郎右衛門が傳話を載せたり。其の傳説に云ふ。坂井太郎右衛門といふ町馬醫は、家業上手にてありしゆゑ、武家方出入の屋敷多し。貞享の頃なるか、篠原主水方へ参り、乘馬共交治などいたし仕舞ひて、壁土のある所に水の溜りありしゆゑに、此の所にて針を洗ひて脇に置き、其の身も水を取寄せて手水遣ひなどせし内に、馬針一本失せたりけり。何ほど尋ぬるといへども不見當。不審ながら其の分にして、太郎左衛門は歸りけり。然る處主水方表門の天井に燕の巢をなし居しが、巢より大なる蛇落ちけり。人々あやしみ見れば、喉より腹へかけ切割れて死したる体也。いかなる事ぞと思ひしに、彼の蛇來りて卵を取喰ふを、燕のかなしみて、太郎右衛門が馬針を、壁土にて蛇の來る道に付置き、蛇を殺したるにて有りしと、小竹善七といふも

の其頃主水方に奉公せしが、現に見たりと語れりとぞ。又博勞は、舊藩中は博勞頭取とて博勞共を裁許なしたり。町會所留記に載せたる寶永七年八月町奉行の言上書に、江戸博勞共は刀を帶せざる事勝手次第之處、町人並の者帶刀之儀天和年中御改の時分、町奉行支配細工人共刀相止みたる頃、町博勞共も町人並の由にて刀相止みたり。浪人博勞、町博勞共、皆貸馬を繰ぎ置きて、馬術稽古の諸士へかしけり。貸馬と稱し是を商業となしたり。

○馬乘之傳話

松雲公夜話録に云ふ。室賀甚四郎は江戸にて名譽成る馬の上手也。先年上野参詣被成時分、室賀馬上にて是も參詣有之を、黒門先にて御覽被成處、地道の馬にて頭持、供前勝れて見事成るに、長手綱にて被乗体無比類。藤倉采女は其の頃博勞にて御扶持方賜り、御馬御用相勤めける故、藤倉を以て所望被成處、此馬は第一歳行き、其上少し存寄も有之間、御用捨可被成と被斷也。然るに達て被仰遣處、左候は、先づ御家來衆御乘らせ候て御覽可被遊とて、牽かせ被指越に付、馬乘高桑五兵衛御乘らせ被遊候處、以之

外口強く、地道之内にも口はなさせ候儀難成、地道乗掛候儀は中々思ひも寄らず。勿論口はなし不申故、早乗杯は會て以て成不申候。馬乘金子久兵衛にも御乘らせ候處、五兵衛同事にて、蛇に繩を付候杯とは、かやうの馬の事に候哉と兩人共に申候。依之御返し被成候へば、左やう可有之。此馬は少し六ヶ敷所有之よし被申候。其後又町乗の跡を御覽被成候處、最前に少も替儀無之、手綱は中にてたるみ、聊強き馬とは相見わさるやうに被乗候。實に奇妙成る乗かた、名人とも可申旨度々御意にて御感被成。と見ゆ。又、金澤御城にて何哉らんの事に付、一藝に達したる者は萬事に渡り申事の由申もの有之處、是は嘗て埒明かざる申事也。假令ば金澤にて、武村九郎太夫は今之世に稀成程の馬乘なれ共、手跡は山本源右衛門の十ヶ一もなる間敷、また源右衛門は能書なれども、馬に乗る事は九郎太夫が十ヶ一も成不申。是にて心得べき事之由、御居間坊主小頭長谷川佐雲を以て被仰出。とあり。加陽諸士系譜に、馬乘役武村九郎太夫、寶永五年被召出、采地二百石賜之。正徳四年加恩百石、合三百石賜之。元文四年死、六十一歳。とありて、

子孫世々馬乘役なり。按ずるに、馬乘役は馬術鍛錬の士にて、舊藩中は淺野川の關助馬場の近邊に邸地を賜はりて、世々居住せり。馬乘の事は徒然草に、城の陸奥守泰盛はさうなき馬乘也けり。馬を引出させけるに、足を揃へてしきみをゆらとこゆるを見ては、是はいさめる馬なりとて、鞍を置きかへさせけり。また足をのべてしきみにけあてぬれば、是はにぶくしてあやまちあるべしとて乗らざりけり。道を知らざらん人、かばかり恐れなんや。又吉田と申馬乘の申侍りしは、馬ごとにこはきもの也。人の力あらそふべからずと知るべし。乗るべき馬をばまづよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に轡・鞍の具にあやうき事や有ると見て、心にかゝる事あらば、其馬をはすべからず。此用意をわすれざるを馬乘とは申也。是秘藏の事也と申しき。とあり。石川訪古游記に、傳曰。齋藤兵庫頭國忠、甚國子。應永廿九年生于賀州富樫郷。幼名甚之助。文安元年叙從五位下。任備前守。年二十三。受舅村上永幸取馬法。師範足利將軍義政公。延徳三年五月三日卒于富樫郷。年七十。其子國好。文安三年生于富樫郷。善騎馬。潤色家傳書。師範將軍